

レクリエーション参与の社会的要件に関する研究

中京大学体育学部 藤原健固

1 研究視点

余暇と所得の増大に伴って余暇活動に多くの関心が寄せられてきた。このことは欧米先進国において一步先んじており、^①1960年代以降のわが国においても認められる現象である。そして、最近のレク(レクリエーション)参与の研究は、2つに大別されるといってよい。1つはエリア・アプローチ(area approach)とも呼ばれるもので、主として年齢、性、住居、職業、地位といった多様な特性との関係で特定地域のレク参与をエコロジカルな観点から明らかにし、且つ参与者の意見聴取により動態的に把握しようとするものである。^②2つはトピカル・アプローチ(topical approach)とも呼ばれるもので、特定地域に限定せず内容的にはエリア・アプローチを指考するものである。^③

本研究は後者に属するものであるが、従来のアプローチとやや異った視点をあげるとすれば次の2点である。第1に、レク参与の社会的要因の解明に当って家族との関係を重視したことである。第2に、ともすれば陥り易い理論的フレーム・ワークの欠如を避けるべく調査データを社会学的視野内において分析することに努めたことである。

その際、交換理論(exchang theory)^④を重視した。それはレク参与を説明する幾つかの理論的フレーム・ワーク^⑤のなかにあって、交換理論が次の理由で最も有効であると考えたからである。すなわち、交換理論は個人の課題遂行の本質と深くかかわっており、レク参与の外的要因(レク・チャンスの獲得の容易さ、家族の規模、収入など)と内的要因(レク参与から得

られる報酬)の解明に有効な役割を果し得ると考えられるのである。それは個人の思考・行動様式が報酬とコストを基底に決定される、という交換理論の仮定に基づいている。すなわち、個人がレク参与を決定するのは必要なコスト(犠牲)以上に得られる報酬が大きい限りにおいてみられる、というものである。それ故、個人もしくは集団は、如何なる理由によるにせよ行動からコスト以上の報酬が期待されなくなると行動を中止する、ということになる。しかし、この場合の報酬は多分に精神的なものも含んでいる。^⑦

交換理論を採用して現代社会のレク参与を家族社会学の立場から明らかにしようとする際の家族(family)は、その制度と形態において次のような意味をもつ。

まず、制度の面から現代の家族をみると直系家族の崩壊という現象があげられる。とくに戦前までの家族は、男系の長子相続制による家制度であり、M. weber のいう家父長制家族(patriachalische familie)であった。すなわち、個人的な恭順関係を土台にした家父長制支配が貫いている家族であった。そして、そこでは戸主の権威に基づく地位が絶対的であって、他の家族構成員は伝統的な犯すべからざる規範(norm)に従順しなくてはならなかったのである。しかしながら、こうした家父長制は第Ⅱ次世界大戦後、①家制度の法制的根拠の崩壊、②デモクラシーを背景にした新しい教育による価値観の変化、③1960年代以降の経済の高度成長による所得と余暇の増大による家庭生活上の諸様式や生活感覚の急変、などによって大

きな変化が認められるようになった。

そして、わが国の家族もバージェスの<制度から友愛へ>^⑧という方向にあり、相互の愛情に基礎をおく親しい結びつきに基づきつつある。それは主として戦後における夫婦双方の学歴の上昇、急激な経済成長、夫婦共働きの普及、といった言わば生産と消費の分離による消費団体としての家族の出現にその基盤をおいている。そこでは、アメリカ的自由主義としての平等の原理、個人の幸福の追求、配偶者選択の自由、結婚後親との別居の自由、などに支えられた家族構成員相互の愛情と意見の一致を基盤とする。その結果、家族の機能は縮小化・単純化されレクの機能でさえ家族の外にかなりの部分が移譲されるようになったのである。

つぎに。形態の面から家族をみると、世帯の細分化が進行し、世帯数を100とした場合の直系尊属（世帯主の両親や祖父母）の比率、その他家族構成員の比率など、どれをとってみてもこの10数年のうちに急激に減少しているのである。そして、婚因によって結ばれた1組の夫婦の結合を中心としてそこから生まれる子供（未婚の）からなる核家族（nuclear family）が一般化したのである。ちなみに、核家族の比率はここ10数年間増加の一面をたどり、直系家族や傍系親までを含む家族は3割にも満たないのである。^⑨

現代の家族は、以上のようにその制度と形態から戦前と大きく変化し、友愛としての家族化と核家族化が定着しつつあると考えられる。

一方、家族の制度的形態的变化が認められるなかで、個人は2つの家族を経験すると言われる。1つは子供の世代から家族をみた場合であり、それは両親と兄弟からなり自己を社会化させた社会的人間に育成させる場としての家族で

ある。2つは親の世代から家族をみた場合であり、それは夫婦と子供からなり子供を生み育てる場としての家族である。前者は、子供にとって全生活的愛護を受けるものであり、いわばコミュニティ的性格をもっており、定位家族（family of orientation）と呼ばれる。後者は、選択の過程を多かれ少なかれ受けた結果形成されたものであり、いわばアソシエーション的性格をもっており、生殖家族（family of procreation）と呼ばれる。

そこで、本稿では現代社会の家族の特徴を踏まえ個人が経験する2つの家族におけるレク参与の社会的要件を、主として次の2点において明らかにしようとした。^⑩

(1) 定位家族とレク参与

社会化要素および報酬—コスト要素との関係で定位家族におけるレク参与を明らかにすること。

(2) 生殖家族とレク参与

絶対要素、意志—決定要素、報酬—コスト要素との関係で生殖家族におけるレク参与を明らかにすること。

2 調査方法

(1)被調査者 全国から無作為に抽出された主婦、627名（表1）。

表1 被調査者内訳

年 令	25才以上	30才以上	35才以上	40才以上	45才以上	50才以上						
	30才未満	35才未満	40才未満	45才未満	50才未満	5人未満	5人以上	いない				
子 供 の 数	2	33	221	264	69	23						
	1人	2人	3人	4人	5人以上	いない						
	36	321	161	13	10	1						
年 収	120万未満	120万以上	150万以上	200万以上	250万以上	300万以上	350万以上	400万以上	450万以上	500万以上		
	150万未満	200万未満	250万未満	300万未満	350万未満	400万未満	450万未満	500万未満				
	14	27	33	59	51	78	66	55	48	92		
学 歴	専常小	中 学	高 校	専門学校	短 大	大 学	その他					
	8	213	214	43	19	14	11					

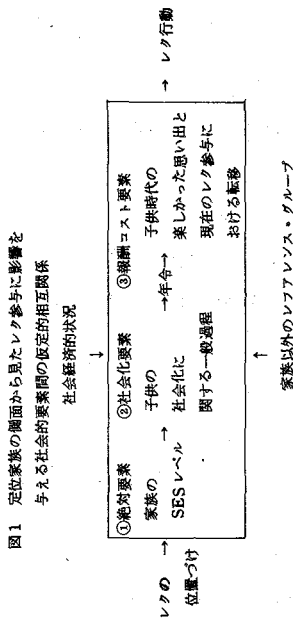
(四)調査項目(44)の概要 SES(所得、学歴、職業)、社会化(兄弟数、育った場所および人口規模、母親の職業の有無)、報酬-コスト(子供の頃の楽しかった思い出、宗教)、意志-決定(レクに対する不一致の頻度、最終的決定者)、役割の限定(望ましいレク組織者、実際のレク組織者)、レク組織者に対する役割期待(レクの重要度、満足度、時間)レク参与の実態(内容、時間)。

(一)調査方法 郵送法によるアンケート調査。

(二)調査時期 昭和54年5月10日-同5月31日

3 結果と考察

(1) 定位家族とレク参与



定位家族から生殖家族への移行は、レク参与に重要な意味をもつ。図1は、定位家族(family of orientation)の側面からみた家族構成員としての個人のレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的な相互関係のダイアグラムを示したものである。^⑪

①社会化要素

表2 兄弟数とレク参与

レク活動	兄弟数	1人		2人		3人		4人		5人		6人		計
		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
スポーツ	2	11.8	4	8.5	16	18.4	15	14.0	21	17.5	35	21.5	9.3	
手芸	2	11.8	10	21.3	16	18.4	25	23.4	20	16.7	27	16.6	10.0	
芸能	0	0	1	2.1	6	6.9	4	3.7	12	10.0	4	2.5	2.7	
園芸	5	20.4	3	6.4	9	10.3	10	9.3	14	11.7	17	10.4	5.8	
おしゃべり	2	11.8	11	23.4	12	13.8	16	15.0	17	14.2	23	14.1	8.1	
TV・ラジオ	1	5.9	8	17.0	19	21.8	19	17.8	25	20.8	31	19.0	10.3	
読書	3	17.6	6	12.8	4	4.6	10	9.3	3	2.5	14	8.6	4.0	
その他	2	11.8	4	8.5	5	5.7	8	7.5	8	6.7	12	7.4	3.9	
計	17	100.1	47	100.0	87	99.9	107	100.0	120	100.1	163	100.1	54.1	
ひとり	2	12.5	4	7.7	9	10.0	8	7.0	21	17.5	16	9.9	6.0	
夫	4	25.0	3	5.8	2	2.2	6	5.3	6	5.0	4	2.5	2.5	
夫と子供	4	25.0	17	32.3	24	26.7	33	28.9	25	20.8	39	24.1	14.2	
子供	0	0	11	21.2	9	10.0	17	14.9	22	18.3	22	13.6	8.1	
サークル仲間	1	6.3	3	5.8	10	11.1	13	11.4	6	5.0	18	11.1	5.1	
親・兄弟・親戚	0	0	3	5.8	3	3.3	3	2.6	1	0.8	4	2.5	1.4	
近所の人	3	18.8	7	13.5	27	30.0	24	21.1	33	27.5	50	30.9	14.4	
仕事仲間	0	0	1	1.9	2	2.2	4	3.5	3	2.5	2	1.2	1.2	
その他	2	12.5	3	5.8	4	4.4	6	5.3	3	2.5	7	4.3	2.5	
計	16	100.1	52	99.8	90	99.9	114	100.0	120	99.5	162	100.1	55.4	

表3 母親の職業の有無とレク参与

レク活動	職業 N・%	有		無		計
		N	%	N	%	
スポーツ	5.8	19.0	3.3	15.1	9.1	
手芸	6.0	19.7	3.9	17.8	9.9	
芸能	1.8	5.9	9	4.1	2.7	
園芸	3.2	10.5	2.2	10.0	5.4	
おしゃべり	4.2	13.8	3.6	16.4	7.8	
TV・ラジオ	5.5	18.0	4.5	20.5	10.0	
読書	2.2	7.2	1.7	7.8	3.9	
その他	1.8	5.9	1.8	8.2	3.6	
計	30.5	100.0	21.9	99.9	52.4	

(0.05 > χ^2_0)

個人が最初に経験するレク活動は、定位家族においてみられる。とくに、就学前の期間において個人のレク活動は、定位家族に大きな影響を受けるのである。その際、具体的には子供の社会化に関する一般的過程-兄弟数、母親の職業の有無、育った場所および人口規模などとレク参与の関係が問われなければならない。

まず、表2から兄弟数とレク参与の関係をみたところ、次の2点が指摘された。①「ひとりっ子」および「2人兄弟」の場合、「読書」がかなり高く(17.5%、12.8%)、「3人兄

弟」以上になると「読書」指向は10パーセント以下を示した。また、「スポーツ」についてみると「3人兄弟」以上においてかなり高く、とくに「6人兄弟」以上の場合顕著であった（2.15%）。⑩誰とレクに参加するかについてみると、「ひとり」でというのは「ひとりっ子」（12.5%）、「5人兄弟」（17.5%）であった。そして、「夫と子供」、「近所の人」と一緒にというのが多くみられ、兄弟の数と誰とレクに参加するかという間には特別の関係がないことがわかった。

つぎに、自分の母親の職業の有無とレク参与についてみたところ、0.5パーセントの危険率で両者の間に正の関係を認めることはできなかった（表3）。

また育った場所および人口規模とレク参与の間にも正の関係は認められなかった。

いうまでもなく、社会化（socialization）は社会の中で演じる多様な役割を個人が発達させる際の影響をもつすべての側面を含んでいる。それ故、社会化要素は以上のほかにも重要な要素を含んでいる。その際、とくに注目されなければならないのは、家族のSESレベルによる影響である。すなわち、多様なSESレベルにおいて定位家族のもとに庇護された子供は、異なるタイプのレク活動に組み込まれていくのである。^⑫

また、社会化のもう1つの重要な要素は、家族外のレファレンス・グループの影響である。子供は思考・行動様式を形成し補強もしくは修正するレファレンス・グループをもつのが一般的であり、それがレク選択の傾向に影響を与え得るのである。^⑬

⑫報酬—コスト要素

表4 子供の頃の思い出とレク参与

思い出 の活動	スポーツ		遊び		おしゃべり		お話し		一緒に出かけること		その他		楽しかった記憶はない		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
スポーツ	4	36.4	3	8.8	10	22.2	7	13.5	35	15.6	2	11.8	61	23	181	84
遊	2	18.2	6	17.6	11	24.4	9	17.3	13	13.6	3	17.5	15	22	173	97
おしゃべり	1	9.1	1	2.9	1	2.2	2	3.8	13	5.8	2	11.8	20	6	47	26
お話し	0	0	3	8.8	3	6.7	4	7.7	25	11.3	3	17.6	38	16	126	54
一緒に出かけること	1	9.1	9	26.5	9	20.0	10	19.2	34	15.1	2	11.8	65	12	54	27
その他	1	9.1	6	17.6	5	11.1	13	25.0	47	20.8	1	5.9	79	26	220	101
楽しかった記憶はない	2	18.2	1	2.9	4	8.9	6	11.5	12	5.3	2	11.8	27	8	63	35
その他	0	0	5	14.7	2	4.4	1	1.8	15	6.7	3	11.8	25	12	94	37
計	11	100.1	34	99.9	45	99.9	52	93.9	225	100.0	17	100.1	384	127	998	511

表5 子供の頃の思い出とレク時間

思い出 の活動	スポーツ		遊び		おしゃべり		お話し		一緒に出かけること		その他		楽しかった記憶はない		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
～30分	0	0	2	6.1	2	4.3	3	5.6	17	6.8	5	27.8	29	9	59	38
30分～1時間	2	20.0	4	12.1	4	8.5	4	7.4	27	10.8	0	41.1	13	8.5	54	26
1時間～2時間	1	10.0	7	21.2	12	25.5	7	13.0	47	18.9	2	11.1	76	25	163	101
2時間～3時間	1	10.0	1	3.0	4	8.5	5	9.3	29	11.6	4	22.2	44	10	65	54
3時間～4時間	1	10.0	1	3.0	2	4.3	3	5.6	19	7.6	0	26.1	10	6.5	36	20
4時間～5時間	2	20.0	5	15.1	3	6.4	2	3.7	12	4.8	0	22.2	4	2.6	26	11
5時間～6時間	1	10.0	1	3.0	4	8.5	6	11.1	7	2.8	1	5.6	20	3	20	23
6時間～14時間	1	10.0	3	9.1	3	6.4	7	13.0	19	7.6	3	15.7	36	6	39	42
14時間～21時間	0	0	0	0	1	2.1	0	0	6	2.4	0	7.4	4	2.6	11	6
小計	9	90.0	22	66.9	35	74.5	62	37	183	73.5	15	82.4	301	84	548	385
しない	1	10.0	11	33.3	12	25.5	31.5	17	6.6	26.5	3	16.7	110	69	451	179
計	10	100.0	33	99.9	47	100.0	102	54	249	99.8	18	100.1	411	153	999	564

レク選択は、個人の多様なレク経験の実際的な結果に関係しており、交換理論に基づいていると考えられる。すなわち、個人は自分にとって一連の選択可能な——最大の利益をもたらし得る——活動を抽出するものである。これらの活動のあるものは新しいレク経験に対する持続的なかわりの結果であったり、子供時代の楽しかった活動であったりする。広い意味で、子供時代に最も報酬が大きかったレク活動が成人後においても合理的な支払われるべきコストとして位置づけられるのである。

まず、表4から子供の頃の楽しかった思い出とレク活動についてみたところ、次の2点が指摘された。⑭「子供の頃の楽しかった思い出」は、「一緒に出かける」（44.0%）が最も多く、ついで「お話し」（10.2%）「おしゃべり」（8.8%）、「遊び」（6.7%）であり、「スポーツ」はわずか2パーセントに過ぎなかった。また、「楽しかった記憶はない」とするものは、24.9パーセントを占めていた。⑮子

子供の頃の楽しかった思い出が「スポーツ」であるものの、現在のレク活動の第1位は「スポーツ」(36.4%)であり、「遊び」のそれは「おしゃべり」(26.5%)、「お話し」のそれは「TV・ラジオ視聴」(25.0%)であり、

「一緒に出かけること」のそれは「TV・ラジオ視聴」(20.8%)であった。すなわち、「スポーツ」に楽しかった記憶をもつのが、子供の頃の経験を成人後も持続する傾向は0.1%の危険率で認められたのである。

つぎに、表5から子供の楽しかった思い出とレク時間についてみたところ、「思い出」の有無との間に有意な差が認められ、「思い出」をもつものはもたないものに比べて現在のレク活動により多くの時間を当てることがわかった。とくに、子供の頃の楽しかった思い出が「遊び」「おしゃべり」のものに、このことが明らかであった。

(2) 生殖家族とレク参与

図2 生殖家族の側面からみたレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的相互関係

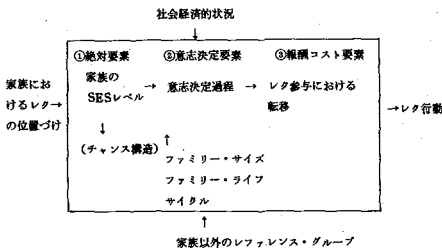


図2は、生殖家族 (family of procreation) の側面からみた家族構成員としての個人のレク参与に影響を与える社会的要素間の仮定的な相互間のダイアグラムを示したものである。

①絶対要素

家族のSES (Social Economic

表5 SESとレク参加

レク活動	1-20		21-30		31-40		41-50		51-60		61-70		71-80		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
スポーツ	143	4	146	5	152	8	156	12	154	10	153	11	228	14	1521	90
手芸	2	0.1	2	0.1	3	0.1	3	0.1	3	0.1	3	0.1	3	0.1	18	0.1
読書	143	4	146	5	152	8	156	12	154	10	153	11	228	14	1521	90
おしゃべり	1	0.01	2	0.02	3	0.03	3	0.03	3	0.03	3	0.03	3	0.03	18	0.1
TV・ラジオ	3	0.02	2	0.01	3	0.02	3	0.02	3	0.02	3	0.02	3	0.02	18	0.1
読書	143	4	146	5	152	8	156	12	154	10	153	11	228	14	1521	90
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	14	100.0	27	100.0	30	100.0	31	100.0	31	100.0	31	100.0	31	100.0	31	100.0

表6 職業とレク参加

レク活動	会社員		公務員		自営業		専業主婦		その他		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
スポーツ	8	23.5	6	15.8	15	13.9	28	15.9	5	13.2	28	22.4
手芸	2	5.9	5	13.2	24	22.2	37	21.0	6	15.8	18	14.4
読書	1	2.9	2	5.3	3	2.8	10	5.7	4	10.5	6	4.8
おしゃべり	2	5.9	8	21.1	10	9.3	17	9.7	5	13.2	14	11.2
TV・ラジオ	10	29.4	8	21.1	20	18.5	25	14.2	4	10.5	12	9.6
読書	7	20.6	6	15.8	24	22.2	32	18.2	5	13.2	26	20.8
その他	2	5.9	1	2.6	5	4.6	19	10.8	3	7.9	8	6.4
計	34	100.0	38	100.0	108	100.0	176	100.0	38	100.0	125	100.0

表7 子供の数とレク参加

レク活動	1人		2人		3人		4人		5人		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
スポーツ	1	12.5	31	146	43	201	11	25.6	0	0	143	90
手芸	1	12.5	38	178	41	192	7	16.3	5	26.3	1	91
読書	1	12.5	5	28	16	75	1	2.3	0	0	143	91
おしゃべり	0	0	26	122	23	107	2	4.6	2	10.5	3	182
TV・ラジオ	1	12.5	48	223	41	192	5	11.6	2	14.3	2	182
読書	1	12.5	13	61	11	51	3	7.0	6	31.6	1	91
その他	1	12.5	11	52	16	75	4	9.3	3	15.8	2	143
計	8	100.0	213	1000	214	1000	43	1000	19	1000	14	999

表8 子供の数とレク参加 (続)

レク活動	1人		2人		3人		4人		5人		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%		
スポーツ	2	5.6	61	190	26	163	3	23.1	2	20.0	0	94
手芸	11	30.6	54	168	32	20.0	1	7.7	2	20.0	0	100
読書	2	5.6	20	62	2	13.2	15.4	1	10.0	0	0	27
おしゃべり	3	8.3	38	118	16	100	0	0	1	10.0	0	68
TV・ラジオ	4	11.1	51	159	25	15.6	1	7.7	0	0	0	81
読書	5	13.9	54	168	41	25.6	1	7.7	2	20.0	0	103
その他	4	11.1	22	69	10	63	3	23.1	0	0	0	39
計	36	100.1	321	999	160	100.1	13	100.1	10	100.0	1	100

Standard)¹⁴⁾は個人の生活様式を決定する際の1つの基本的な要件であり、レク参与の分析において重要な役割を果す。

②年 収 全体的なレク参与は「TV・ラジオ視聴」(19.3%)と「スポーツ」(17.2%)が高く、「芸能」(5.2%)と「読書」(

6.9%)は低かった。また、家族の年収の程度が個人(主婦)のレク参与を規定する1つの社会的要件であることが判った。すなわち、年収250万円以下の場合「TV・ラジオ視聴」が高く、350万円以上の場合「スポーツ」と「手芸」が高かった(表6-④)。すなわち、年収が高い場合、積極的なレク活動に参加し、(低い年収の場合比較的消極的レク活動に参加する傾向を示したのである。

⑤職業 職業との関係でみると、比較的時間の多い職業従事者の場合「芸能」と「読書」指向が強く、そうでないもの場合「TV・ラジオ視聴」と「おしゃべり」指向が認められた(表6-⑥)。また、全体的に「スポーツ」(17.3%)指向もかなり高く、「TV・ラジオ視聴」(19.3%)と「手芸」(17.7%)について第3位であった。以上のことは余暇時間の多い職業従事者は、より積極的なレク活動を指向し、その内容も自己求心的な傾向を示唆するものである。

⑥学歴 学歴とレク参与の関係をみたところ、明らかな関係は認められなかった。強いて言えば、若干ではあるが高学歴者は「読書」と「園芸」指向であり、低学歴者は「TV・ラジオ視聴」指向であった(表6-⑦)。

以上みてきたように、SESは個人のレク参与を規定する際の1つの社会的要因となり得る。すなわち、家族の収入は個人のレク活動と関係をもっており、同時に職業と学歴も例外ではなかったのである。しかし、その程度はあまり高くなかった。それは主として次の2点に負っている。1つは、わが国の場合、アメリカのような多民族国家と異なり、単一民族であることから国民の思考・行動様式がかなりワン・パターン化されていること。2つは経済的格差がそれ

表6 年齢別レク参与

④ 時間

レク時間	25才以下		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N		N		N		N		N		N		
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%		
— 30分	1	50.0	1	3.0	24	11.4	12	4.8	1	1.4	0	0	39
30分-1時間	0	0	4	12.1	23	11.0	22	8.9	7	10.1	2	9.1	58
1時間-2時間	0	0	4	12.1	39	18.6	49	19.8	11	15.9	1	4.5	104
2時間-3時間	0	0	4	12.1	20	9.5	25	10.1	5	7.2	1	4.5	55
3時間-4時間	0	0	2	6.0	17	8.1	14	5.6	2	2.9	2	9.1	37
4時間-5時間	0	0	4	12.1	9	4.3	11	4.4	1	1.4	1	4.5	26
5時間-6時間	0	0	2	6.0	6	2.9	9	3.6	6	8.7	0	0	23
6時間-14時間	0	0	1	3.0	14	6.7	17	6.9	5	7.2	5	22.7	42
14時間-21時間	1	50.0	1	3.0	1	0.5	4	1.6	2	2.9	3	13.6	12
小計	2	100.0	23	69.7	153	72.9	163	65.7	40	58.0	15	68.2	396
しない	0	0	10	30.3	57	27.1	85	34.3	29	42.0	7	31.8	188
計	2	100.0	33	100.0	210	100.0	248	100.0	69	100.0	22	100.0	584

⑥ 活動内容

レク活動	25才以下		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N		N		N		N		N		N		
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%		
スポーツ	0	0	8	20.8	43	21.8	38	16.0	4	6.7	1	5.9	94
手芸	1	50.0	5	19.2	38	19.3	44	18.6	9	15.0	1	5.9	98
芸能	0	0	0	0	10	5.1	12	5.1	5	8.3	0	0	27
園芸	0	0	1	3.8	20	10.2	27	11.4	8	13.3	2	11.8	58
おしゃべり	1	50.0	3	11.5	26	13.2	35	14.8	10	16.7	6	35.3	81
TV・ラジオ	0	0	4	15.4	32	16.2	53	22.4	9	15.0	5	29.4	103
読書	0	0	1	3.8	14	7.1	13	5.5	9	15.0	2	11.8	39
その他	0	0	4	15.4	14	7.1	15	6.3	6	10.0	0	0	39
計	2	100.0	26	99.9	197	100.0	237	100.1	60	100.0	17	100.1	539

ほど強くはないこと。

しかしながら、SESに高いプレステイジをもつ人々が、より多様で変化のあるレク活動を追求する傾向を認めることはできる。それは家族のSESレベルが個人のレク選択のチャンスにかなり影響を与えるからである。すなわち、レクのチャンス構造は、SESレベルに影響を受けて決定されるのである。例えば、低いSESレベルの人々は、時間的経済的負担を強いられ且つ努力を要するレク活動に参加する度合は多いとは言えないのである。

生殖家族におけるレク参与の問題を考察する際、以上みてきたSESとの関係の他に2つの社会的要因との関係を明らかにする必要がある。1つはファミリー・サイズ(子供の数)であり、2つはファミリー・ライフ・サイクル(年齢)である。

まず、ファミリー・サイズ（子供の数）とレク参加についてみたところ、次の2点が指摘された（表7）。④「子供の数」は「2人」（59.3%）が最も多く、現代社会の核家族的状況をよく表わしており、「2人」から「3人」の子供をもつ家族は全体の88.9パーセントを占めていた。⑤「子供の数」が「1人」から「4人」までの家族についてみると「1人」の子供をもつ家族では「手芸」（30.6%）が最も多く、「2人」のそれは「スポーツ」（19.0%）「3人」のそれは「TV・ラジオ視聴」（25.6%）「4人」のそれは、「スポーツ」（23.1%）であった。これらの調査結果は「2人」以上「4人」までの子供をもつ家族においては、「スポーツ」が比較的高い報酬をもたらすレク活動であることを示している。さらに、子供の数と週当たりのレク時間の関係をみたところ、「子供の数」が「1人」から「4人」までの家族では「1時間」から「2時間」が最も多かった。

つぎに、ファミリー・ライフ・サイクル（年齢）とレク参加の関係についてみたところ（表8）、次の2点が明らかにされた。④全体の67.8パーセントがレク活動に時間をとっており、週当たり「1時間以上—2時間未満」（26.3%）が最も多く、ついで「30分—1時間未満」（14.6%）、「2時間以上—3時間未満」（13.9%）であり、年齢による差異は認められなかった。⑤レク活動の内容をみると、「30才以上—35才未満」では「スポーツ」（30.8%）「手芸」（19.2%）、「TV・ラジオ視聴」（15.4%）；「35才以上—40才未満」、「スポーツ」（21.8%）、「手芸」（19.3%）、「TV・ラジオ視聴」（16.2%）；「40才以上—45才未満」では「TV・ラジオ視聴」（22.4%）、「手芸」（18.6%）「スポーツ」（16.0%）；「45才以上—5

0才未満」では「おしゃべり」（16.7%）、「手芸・読書・TV・ラジオ視聴」（各15.0%）、「スポーツ」（6.7%）；「50才以上」では「おしゃべり」（35.3%）、「TV・ラジオ視聴」（29.4%）、「読書」（11.8%）であり、年齢が高くなるに従って「スポーツ」や「手芸」といった積極的なレク活動から離れる傾向が認められた。

②意志—決定要素

生殖家族における家族構成員の思考・行動様式の最も重要な側面の1つは、家族内の意志—決定プロセスに関係している。いうまでもなく、個人の思考・行動様式は、家族内の他の成員の規制を受ける。その際、家族内でのレク参加の決定タイプ、レクに対する不一致、レク組織者に対する役割期待、および役割遂行に対する態度が問われなければならない。

③レク参加の決定タイプ 　いつ、どこで、誰と、どういう方法で家族のレク行動をとるかを決定する際、3つの基本的な決定タイプが考えられる^⑬。すなわち、合意の決定、調和的決定、そして事実上の決定である。

合意の決定は、家族レクの決定に際しすべての家族構成員が明確な全体的合意を示し、且つ決定に参加する最も民主的なタイプである。これに対し調和的決定は、すべての家族構成員が決定に同意はするものの、決定に参加しないタイプである。事実上の決定は、レク行動への決定が特定の家族構成員によってなされ、決定はそうした事実の後になされるタイプである。

家族レクに関するこれら3つの決定タイプは、家族としての小集団の2つの重要な側面に密接に関係している。それは、家族構成員間の価値観とコミュニケーションの程度である。すなわち、家族レクについての決定は家族構成員間の

価値の一致と相互のコミュニケーションの確保の割合によって、決定されるのである。すなわち、価値の一致と相互のコミュニケーションの確保が最高にみられる場合、合意の決定がなされ得るのである。また、合意の決定は、すべての家族構成員に対して最大の報酬を提供し得る。これに対し調和的決定は、一般に家族構成員間の別々の価値志向の結果であり、且つコミュニケーションを通じて合意が得られない場合にみられるタイプである。また事実上の決定は、決定が事実の後になされるため家族構成員間のコミュニケーションが不可能であり、価値の一致も確保され得ないのが一般的である。

①家族レクリエーションにおける不一致と意志決定 まず、家族レクリエーションについての不一致の頻度についてみたところ(表9)、全体の半分以上(56.2%)に不一致が認められた。しかし、「非常にある」(7.4%)は少なかった。また、家族レクについての不一致が認められる割合は、低い年齢ほど多かった。さ

表9 家族レクについての不一致の頻度

年齢	25才		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
非常によくある	0	0	1	3.2	12	5.7	19	7.6	7	11.3	4	19.0	43
時々ある	1	5.0	18	58.1	107	50.5	126	50.4	26	41.9	4	19.0	282
ほとんどない	0	0	4	12.9	66	31.1	76	30.4	19	30.6	9	42.9	178
全くない	1	5.0	4	12.9	27	12.7	29	11.6	10	16.1	4	19.0	75
計	2	10.0	31	100.0	212	100.0	250	100.0	62	99.9	21	99.9	578

表10 家族レクについて最終的な判断を下す者

年齢	25才		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
いつも夫	0	0	4	12.9	47	23.2	63	26.1	21	33.3	6	33.3	141
どちらかといふ方	1	5.0	14	45.2	65	32.0	57	23.7	12	19.0	4	22.2	153
夫と妻が同じ程度	1	5.0	0	25.8	43	21.2	62	25.7	17	27.0	1	5.6	132
どちらかといふ方	0	0	2	6.5	30	14.8	25	10.4	7	11.1	1	5.6	65
いつも妻	0	0	0	0	9	4.4	14	5.8	2	3.2	4	22.2	29
その他	0	0	3	9.7	9	4.4	20	8.3	4	6.3	2	11.1	38
計	2	10.0	31	100.1	203	100.0	241	100.0	63	99.9	18	100.0	558

表11 家族レクについての不一致と意志決定 (%)

	不一致	夫の決定権	
夫の学歴	中 学	56.8	44.0
	高 校	59.5	58.6
	専門学校以上	51.2	53.8
家の宗教	キリスト教	66.5	41.7
	法 華 教	60.0	55.6
	真 宗	54.3	45.5
	浄土真宗	55.3	54.6
	禅 宗	53.1	51.7
	創価学会	60.9	59.1
	知らない	62.2	53.3
そ の 他	57.1	50.0	
夫の職業	会社団体役員	56.1	51.4
	農 業	40.9	45.0
	商 業	58.1	51.8
	専 門 職	57.6	51.8
	公 務 員	54.1	54.3
	そ の 他	56.8	56.6
子供の数	1 人	51.3	45.9
	2 人	54.7	54.8
	3 人	63.4	49.1
	4 人	27.8	56.3
	5 人~	45.5	33.3
	いない	0.0	100.0
妻のサークル活動	教会の活動	80.0	33.3
	お寺の活動	30.8	61.5
	婦人会の活動	55.3	56.3
	スポーツ・クラブ	43.5	63.6
	手芸グループ	45.0	61.1
	学習グループ	57.1	41.7
	政治団体	100.0	100.0
	文芸グループ	62.5	28.6
	そ の 他	81.3	54.8
入っていない	55.2	48.6	

らに、「非常によくある」度合は高い年齢ほど高く、「時々ある」度合は逆に低い年齢ほど低かった。

つぎに、家族レクについて最終的な判断を下す者についてみると(表10)、全体的には「夫」(52.7%)が多く、ついで「夫と妻」(23.7%)であり、「妻」(16.8%)の決定権は比較的lowかった。さらに、「いつも夫」が決定者である場合は25.3パーセントであるのに対し、「いつも妻」の割合はわずか5.2パーセントであった。とくに、この傾向は低い年齢において強かった。また、「夫と妻」が同程度に決定権をもつ割合は、23.7パーセントであった。

以上の調査結果は、家族レクの決定において次の点を意味するものである。すなわち、家族レクについての決定においてかなりの不一致が認められ、多くの場合夫が決定者であり、妻も決定に参与している。このことは家族レクについての思考・行動様式が基本的には合意に基づくものではあるが、事実上の決定パターンがかなり支配していることを示している。そして、仮りに調和的決定を認めても、妻よりも夫がイニシアティブを握っていると考えられるのである。

さらに、家族レクについての不一致と意志決定を掘り下げて分析したところ(表11)、次のようなことが判った。

まず、家族レクについての不一致は半分以上の家族において認められたが、夫が「高校」の学歴をもつ場合最も高く(59.5%)、同時に「夫の決定権」(58.6%)も高かった。一方、「中学」の学歴をもつ場合「夫の決定権」(44.0%)はそれほど高くなかった。「専門学校」以上の高学歴をもつ場合、不一致も「夫の決定権」もそれほど高くなく調和的決定パターンが

かなり顕著であることが認められた。また、宗教との関係でみると不一致の程度にそれほど差を認めることはできなかった。さらに、職業との関係でみると、不一致と夫の決定権は、ともに「農業」を除いて半分以上の家族において認められた。

つぎに、子供の数との関係でみると、子供が「いない」家族では、不一致は少なかったものの夫の決定権は強かった。そして、「4人」の子供をもつ家族の場合不一致は少なく、「5人以上」の子供をもつ家族では夫の決定権は弱かった。また、妻のサークル活動所属との関係でみると、妻が何らかのサークル活動に所属している家族の方がそうでない家族に比べて不一致は高く、夫の決定権も若干強かった。そして、「お寺の活動」、「スポーツ・グループ」、「手芸グループ」に所属している場合、不一致は少なく、「教会の活動」、「学習グループ」、「文芸グループ」に所属している場合夫の決定権は弱かった。

◎家族レクの組織者に対する役割期待

表12 望ましい家族レクの組織者

組織者 N・%	25才		30才		35才		40才		45才		50才		計
	30才		35才		40才		45才		50才				
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%			
いつも夫	0	0	3	9.1	30	136	39	148	13	200	3	130	88
どちらかといえば夫	0	0	8	24.2	32	145	23	87	9	138	2	87	74
夫と妻が同程度	2	100.0	10	30.3	61	276	72	273	12	185	3	130	160
誰でもよい	0	0	10	30.3	78	353	105	398	26	400	11	478	230
どちらかといえば妻	0	0	0	0	7	32	12	45	2	30	2	87	23
いつも妻	0	0	1	3.0	3	14	3	11	1	15	0	0	8
子供	0	0	1	3.0	10	45	10	38	2	30	2	87	5
計	2	100.0	33	99.9	221	100.1	264	100.0	65	99.8	23	99.9	608

家族構成員は各々家族集団内において各々の地位を与えられる。そして、各々期待される一定の思考・行動様式というものが存在する。これが役割期待である。レク活動においては、とくに夫婦の役割期待が大きな力をもっていると考えられる。とくに、伝統的な家族行動の決定

権は、特定の家族構成員（夫）に限定されているのが普通である。それは、しばしば、役割期待にたいする伝統的な力を提供することであり、多様なサブ・カルチャ的イデオロギーに結合されている。他方、戦後における急激な社会変動の結果、家族行動は強力な役割期待を少なくしていると考えられてきた。こうした文脈のなかで、家族レクの組織者に対する役割期待の多様性を考察した。

まず、望ましい家族レクの組織者についてみると（表12）、「誰でもよい」（38.0%）が最も多く、ついで「夫と妻が同程度」が26.1パーセントであった。「夫」と「妻」に絞ってみると「夫」（26.7%）が断然多く、「妻」はわずか5.1パーセントであった。すなわち、全体的に「夫」への傾斜が強かった。とくに、「30才以上-35才未満」と「45才以上-50才未満」において強かった。

表13 誰が家族レクを組織しているか

組織者	25才		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
いつも夫	0	0	5	1.52	39	18.1	42	16.7	10	14.7	2	9.1	98
どちらかといえば夫	1	5.00	5	1.52	41	19.0	43	17.1	13	19.1	3	13.6	106
夫と妻が同程度	0	0	8	2.42	48	22.2	65	26.2	15	22.1	5	13.6	140
どちらかといえば妻	0	0	7	2.12	30	13.9	32	12.7	6	8.8	1	4.5	76
いつも妻	1	5.00	2	6.0	17	7.9	22	8.7	6	8.8	4	18.2	52
子供	0	0	0	0	10	4.6	10	4.0	6	8.8	2	9.1	28
その他	0	0	1	3.0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
いない	0	0	5	1.52	31	14.4	37	14.7	12	17.6	7	31.8	92
計	2	10.00	33	10.00	216	106.1	252	100.1	68	99.9	22	99.9	593

つぎに、実際に誰が家族レクを組織しているかについてみたところ（表13）、「夫」（34.4%）、「妻」（21.6%）、「夫と妻が同程度」（23.6%）であり、実際の組織者において「夫」への傾斜が一層明確にされた。しかし、「妻」の存在も無視できなかつた。これは戦後わが国における妻の座が強くなったことを示す一証左である。とはいうものの、表10との関係でみると、やはり家族レクに対する夫婦の規範は「夫」に強く傾斜していることが判る

し家族レクの最終判断者は「夫」であり、全体の52.7パーセントを占め、妻のそれは16.8パーセント）。

以上の分析結果は、家族レクについての役割期待が認められたものの、「夫」または「妻」に限定して考えることの非妥当性を示唆するものである。

④役割遂行に対する態度

表14 家族レクに対する態度と時間

態度	25才		30才		35才		40才		45才		50才		計
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
非常に重要	1	10.00	1	7.7	24	22.6	12	11.1	1	4.2	0	0	39
まあ重要	0	0	4	3.08	23	21.7	22	20.4	7	29.2	2	5.00	58
どちらでもない	0	0	4	3.08	39	36.8	49	45.4	11	45.8	1	2.50	104
重要ではない	0	0	4	3.08	20	18.9	25	23.1	5	20.8	1	2.50	55
計	1	10.00	13	10.01	106	100.0	108	100.0	24	100.8	4	10.00	256
非常に不満足	0	0	4	12.9	4	1.9	6	2.5	3	4.8	0	0	17
どちらでもない	1	5.00	2	6.5	27	12.7	26	10.7	8	12.7	7	3.60	71
だいたい満足	0	0	23	7.42	149	70.3	183	75.3	43	68.3	10	5.00	398
非常に満足	1	5.00	2	6.5	32	15.1	28	11.5	9	14.3	3	1.50	85
計	2	10.00	31	10.01	212	100.0	243	100.0	63	100.1	20	10.00	561
全く足りない	1	5.00	10	30.3	40	18.8	68	27.3	16	26.2	10	4.35	145
少し足りない	0	0	9	27.3	77	36.2	96	38.6	23	37.7	3	1.30	208
だいたい満足	1	5.00	14	42.4	90	42.3	82	32.9	22	36.1	10	4.35	219
あまり意味	0	0	0	0	4	1.9	2	0.8	0	0	0	0	6
ありすぎる	0	0	0	0	2	0.9	1	0.4	0	0	0	0	3
計	2	10.00	33	10.00	213	100.1	249	100.0	61	100.0	23	10.00	581

表15 家族レクに使われる時間と満足度

時間	05		10		15		20		25		30		35		40		45		50		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
全く足りない	10	25.6	14	25.6	17	15.5	10	18.0	2	2.9	5	19.3	3	13.0	3	20.0	5	33.3	30	5.33	30.0	
少し足りない	12	30.8	30	36.4	53	51.9	19	35.8	14	40.0	6	23.1	7	30.4	10	23.5	4	33.3	145	25.4	145.0	
だいたい満足	17	43.6	21	38.2	32	31.1	24	45.3	12	34.3	14	52.8	13	56.5	23	53.6	4	33.3	160	28.0	160.0	
あまり意味	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.9	1	3.8	0	0	1	2.3	0	0	3	0.53	3.0	
ありすぎる	0	0	0	0	1	0.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.17	1.0	
計	39	100.0	55	100.1	93	100.0	53	100.0	35	100.1	24	99.9	23	99.9	43	100.0	12	99.9	389	69.8	389.0	

分析のこの部分は、家族レクの重要度と満足度および時間に対する態度に向けられる（表14）。

まず、家族レクの重要度についてみたところ（表14）、重要（37.9%）、「どちらでもない」（40.6%）、「重要ではない」（21.5%）となっており、重要度はそれほど高くなかつた。

また、家族レクの満足度についてみたところ、「満足」（86.1%）、「どちらでもない」（12.7%）、「不満足」（3.0%）であった。

さらに、家族レクに使われる時間についてみ

たところ、「十分ある」(1.5%)、「だいたい満足」(37.7%)、「足りない」(60.8%)であった。さらに、家族レクに使われる実際の時間とそれに対する満足度をみたところ(表15)、両者の間に明らかな関係は認められなかった。

以上の調査結果は、家族レクに対してその重要性をそれほど感じていないにもかかわらず、参加する立場からは多くのものが満足していることを示唆している。そして、時間についてはかなりのものが足りないと答えており、家族レク参与の1つの問題点として指摘される。

③報酬—コスト要素

絶対要素、意志—決定要素について生殖家族におけるレク参与の最終的な要素は、交換理論に基づく報酬—コスト要素である。すなわち、それは転移の問題であるが、ここでは「サークル所属」および「宗教」との関係で考察した。

まず、サークル所属とレク参与についてみたところ、次の2点が指摘された。①サークル所属とレク参与の間には、サークル所属のものがそうでないものに比べて活動により多くの時間を当てていた。②レク活動の内容とサークル活動の内容の間には、とくに明らかな関係は認められなかった。

さらに、宗教と家族レク参与の間にも正の関係は認められなかった。

4 結 語

以上、レク参与の社会的要件について調査結果をもとに考察した。しかしながら、調査結果は定位家族と生殖家族双方においてレク参与の社会的要件が、それほど際立って明確なものではないことを明らかにした。

それは被調査者の——広い意味で——画一性に基づくものと考えられる。すなわち、大多数

の国民は現在自らを「中流」と考えており、じつ国民の間にドラマティックな差はそれほど強くないのである(とくに外国と比べて)。こうした平均化・画一化された国民の一部を構成する被調査者のなかにあつては、それほど思考・行動様式の差も認められないのが一般的であり、今回の調査結果はレク参与との関係でこれを証明したにすぎない。

しかしながら、レク参与の社会的要件を家族との関係で究明しようとする際、いくつかの問題点が残された。1つは、定位家族におけるSESとレク参与の問題である。今回の調査では、主婦に重点をおいたためこの問題は割愛せざるを得なかった。2つは、本稿で扱わなかったレク参与に影響を与える種々の社会的要件の解明である。3つは、レク参与の社会的要件を解明するための理論的モの構築である。しかしながら、とくに第3番目の課題に対する見通しは、現在のところ立っていない。

注・文 献

(1)歴史的には、既に1950年代にレク研究に1つのエポック・メイキングがなされた。

(2)例えば、Lucas, R., "Recreation Use of the Quetico-Superior Area.", Lake States Forest Experiment Station Bulletin, No. Ls-8, 1964; Taylor, C. D. and R. Y. Edwards, "A survey of summer visitors to Wells Gray Park, British Columbia", the Forestry Chronicle, 36, pp. 346-354, 1960.

(3)例えば、Clark, A., "The use of leisure and its relation to levels of occupational prestige.", American Sociological Review, 21: pp 301-307, 1956.

(4)Homans, G., Social Behavior:

Its Elementary Forms, New York: Harcourt, Brace and World, 1961, Thibaut, J. and H. Kelley, The Social Psychology of Groups, New York: John Wiley and Sons, pp. 14-15, 1959.

(5)レク参与を説明する他の主要な理論的フレーム・ワークとして次の如きものがある。

④代償仮説 (Compensatory Hypothesis) : この仮説は、職業によって活動が決定される、という前提にたっており、且つ安全弁 (safety-valve) の効果をも前提にしている。すなわち、個人の退屈したとき何かすっきりしたことを探すというのである (Burch, W., "The social circlet of leisure: Competing explanations.", Journal of Leisure Research, 1, pp. 125-145, 1969) . ⑤類似仮説 (Similarity Hypothesis) : この仮説は、代償仮説と正反対のものであり、個人はその生活スタイルにおいて首尾一貫性を求める、という前提にたっている。この仮説は、家族の行動パターンにおける "習慣の力" に関連した社会心理学的研究においてよく援用される概念であり、個人は緊張をもたらすような状況を避け、行動に首尾一貫性をもたらす状況を求める、という前提に立っている。この仮説は、チャンスが与えられれば個人は自分の好みに合った思考・行動様式を持続させるためのレク活動を選択することを示唆している (Burch, W., op.cit.) ⑥準拠集団理論 (Reference Group Theory: この理論は、個人の社会的行動は職場の同僚、友人といった準拠集団によって規制される、との前提に立っている。そこでは、準拠集団の社会規範と価値が大きな力をもつ。Burch はキャンパーに関する研究で、レク・スタイルの決定に

及ぼす準拠集団の影響を扱った (Burch, W., op.cit.) . ⑦チャンス理論 (Opportunity Theory) : この理論は、多様なレク参加は効用価値と関係するというものである。そして、この理論は、農村と都市のレクを論ずる際よく援用され、都市の住民は農村の活動に参加する機会 (チャンス) が少ないという理由でそれに興味をもつと主張する (Hendee, J., "Rural-urban differences reflected in outdoor recreation participation," Journal of Leisure Research, 1, pp. 333 - 341, 1969) .

(6)同時に、交換理論 (Exchange Theory) は家族理論の構築にも大きな理論的根拠を提供し得るものと考えられる (Edwards, J., "Family behavior as social exchange", Journal of Marriage and the Family, 31, pp. 518 - 526, 1969.

(7)例えば、報酬なしに他人に奉仕するような場合でさえ、精神的な満足を得ることが可能である。

(8)Burgess, E.W. and H.J. Locke, The Family: from institution to companionship, 1945.

(9)松原治郎、『現代の家族』、日本経済新聞社、1964; 同「現代の家族」東京大学公開講座『家』東京大学出版会、1968。

(10)従来のレク研究において、あまり関心が払われてこなかった問題領域である。

(11)本稿では主婦を対象に調査したため、定位家族におけるSESとレク参与の解明はできなかった。

(12)Kohn, M., Class and Conformity: A study in Values, Homewood, Illinois: Dorsey Press, 1969.

(13)例えば、少年サッカークラブに所属するこ

とは、家族では味わえない集団行動への興味を
発展させ得る。しかし、本稿では調査によって
この点を考察することは、できなかった。

(14)本稿では、年収、学歴、職業でとらえた。

(15)現職と仮定職を含んでいる。

(16)ちなみに、米国の場合はかなり高い (Se-
ssons, H. D., "An analysis of sele-
cted variables affecting outdoor
recreation patterns.," Social For-
ces, 42, pp.112-115, 1963.

(17)この点はアメリカにおいても指摘されてい
るところである。「……より高い prestige
をもった人々は、より多様で変化のあるレク活
動を追求する傾向がある」(Sessions, H.D.,
"An Analysis of selected varia-
bles affecting outdoor recreation
patterns." Social Forces , 42, pp.
112-115.

(18) もちろん、図2に示す通り、他の要因に
よる規制も受ける。

(19) Turner, R., Family Interaction,
New York: John Wiley and Sons, 1970.